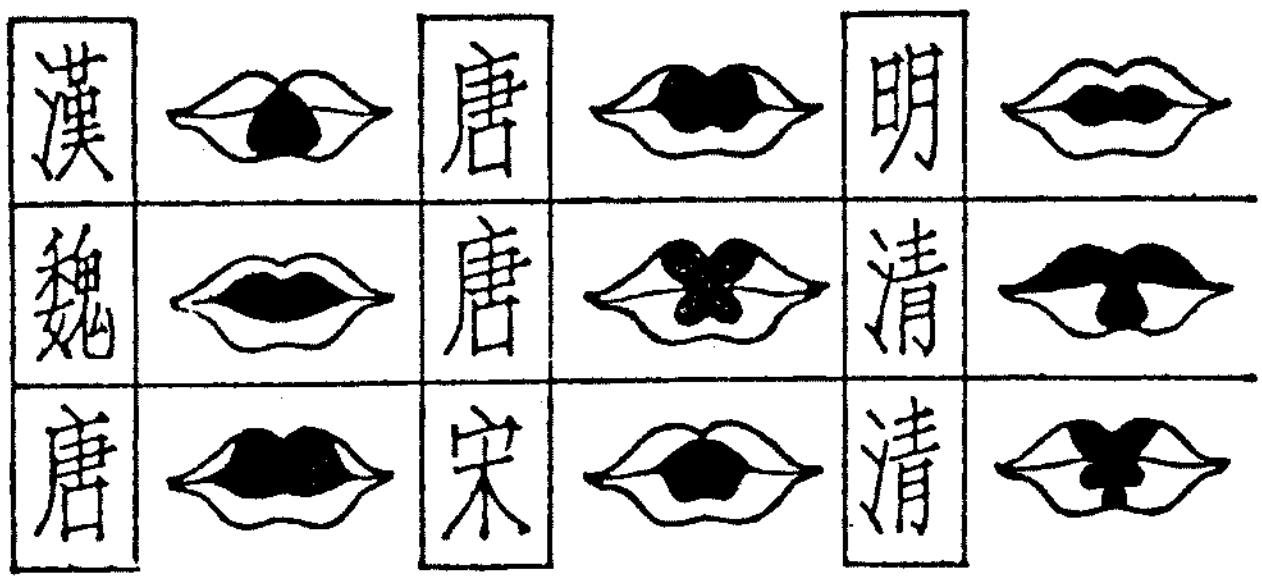
六、海外事情編

紅の故郷いずくたずぬれど
あまりに遠きべにのあかしよ

歴代の点朱唇(口紅)の様式(16)



まゆはきを俤にして
紅粉の花　（芭蕉）

行末は誰が肌ふれむ
紅の花　（芭蕉）

ごく最近までは、ベニバナといえば山形、山形といえばベニバナと自負できたのであるが、それが今や少しずつくずれてきている。日本国内、花卉としてのベニバナはどこでも作れるし、促成、抑制と開花操作も自由自在であり、花卉市場では横文字でカルサムスなどと呼ばれる時代になってしまったからである。

それでは海外の事情はどうなのであろう。私の得たささやかな情報や体験を最後に述べておきたいと思う。

一、アメリカのベニバナ

昭和四九年一月、カリフォルニア大学に出かけた私は、期待はずれの連日の雨と霧に失望して、「何がサニーカリフォルニアだ」と不平をもらしたものだった。その頃のカリフォルニアはちょうど雨季で、道ばたにも故郷と同じような雑草が生えていて、「世界中変りないナ」などと思った。

ところが三月半ば頃になるとアーモンドの花が咲き出し、雨も少くなった。休耕していた畑に、何やら緑の苗が見えはじめた。広大な畑に整然と「すじ播き」された作物、それはベニバナであった。花の咲く頃、私は本業の果樹の研究に熱中していて、郊外のベニバナ畑を見ない

でしまった。恐らく、あれだけのベニバナがいっせいに開花したら、一面黄金のジュータンみたいであったことであろう。

気がついた頃にはコンバインが刈り取りをしていた。まるで大豆の枯れた株を刈り取るようにバリバリ音をたてながら。

スーパーで「サフラワーオイル」を買って、サラダ油として食べてみた。透明で無臭の軽い油であった。効能書きにはコレステロールを去ると説明されていた。値段は、もう忘れてしまったが、普通のサラダ油よりは高かったように記憶している。

果樹の調査によく農村に出かけたが、日系人の多いフレスノ市の近辺にはスモモの果樹園があって、ほしスモモ用の樹がたくさん植えてあった。マンガン過剰症の木とか、鉄欠乏の園とか潅がい効果のでている園とか色々歩いたが、その折、果樹園の周辺道路にトゲの多い黄色い花の雑草をよくみかけた。淡黄色のかれんな花であった。幸いカメラにおさめておいたが、それから三年後、それはヨーロッパから持ち込まれた野生のベニバナ（カルサマス・ベェテカス）（図12）であることを知った。アメリカのベニバナは、すべて採油のための油料作物であり、カリフォルニア州では、潅がい水利費が高いので、それ程水の使用量の多くないベニバナが作付けされるのだとも聞いた。地力の低い土地でも栽培可能で、機械播き、機械収穫であった。

二、インド、アフガニスタン、エジプトのベニバナ

昭和五二年六月、約三週間の予定で、インド、アフガニスタン、エジプトの三カ国をベニバナを求めて旅をした。山形新聞、山形放送主催の取材旅行である。この三カ国を選んだのは、インドはベニバナの輸出国であり、港町ボンベイあたりで種子の入手が可能と思われたこと。アフガニスタンは、アメリカのノーレス博士や、日本の京大北村教授がこの国で野生種を観察していること。エジプトは、カイロ博物館に歴史的な手がかりがありそうに思われるうえ、アスワンハイダムまでナイル川を逆上れば、岸辺に野生ベニバナが生えているのではないかなどと予想したからである。

最初のインドでは、結局種子の入手ができただけで、ベニバナの草姿を見ることは不可能であった。それでもボンベイ市に駐在する三菱商事支店の話では、ベニバナは採油用にたくさん栽培されており、油は輸出できないものの、搾油粕は飼料として輸出しており、マーケットに行けば種子の入手はできるはずだということであった。

デカン高原の中央にあるプーナ農業大学に行けばベニバナ作りの情報が得られるのではないかとの話で出かけたが、今は栽培していないとの返事しか得られなかった。

ボンベイ市民を注意深く観察してみたが、紅の名残りがそこここに見られた。婦人のひたい

につけられたビンディーの赤い色は、おそらく昔はベニバナの紅であったのだろう。やや黒い肌色に、パッとさえる紅の斑点は、実に魅力的であった。身にまとうサリーも、今では日本製の布地が高級品ときいたが、かってはベニバナ染めの布地が使われた時代があったのだろうと思われた。

ヒンズー教でも、赤は邪気をはらう神聖な色で、本尊も朱色に輝いて見えたし、お参りの人はひたいに赤印をつけてもらって寺院を出て来るのを見た。

次に訪れたアフガニスタンは、出発前文献で得た知識を裏づけるように、ベニバナの仲間の植物の多い国であった。到着早々、ホテルのフロントに無造作に飾られたベニバナのドライフラワーを見て期待感に胸がふくらんだ。

しかし、訪問の季節が悪かったせいか、栽培の現場を見ることはできなかった。小さな村の店屋でベニバナ種子を見つけた。鳥の餌だという。インドでも同じ答であった。外国人に聞かれた場合、食用と答えるのに恥かしさがあるのであろうか。後日、カブール大学の植物学の教授に会う機会もあったのだが、ベニバナ栽培のことはわからないとのことであった。

野生のベニバナらしきものは山地でいくつか見ることができた。というよりは、近縁のアザミ科植物があまりに豊富で、見分けがつきにくい程であった。アザミは、人間の背丈け位の大型ものから、瓦礫の地面にはいつくばったような草丈の低いものまで色々見られた。

もっとくまなく調査すれば、きっと、この国のどこかに野生のベニバナがありそうな気がし

た。主都のカブールなどでは種子や油がどのように売買されているのか街を見て歩いても全く知ることができなかった。

カブール博物館所蔵の壁かけ布や仏頭を見せてもらった。いずれも紅染めのあとがうかがわれた。布地の紅染めは変色していて、決して美しいものではなかったが、それだけに本物の染めあとと判断された。仏の顔は東洋風というより西洋風の（ギリシャ彫刻などに見られる）顔立ちの整ったものが多かったが、口唇が赤く塗り込められたものがあり、赤色の濃いものは顔料、薄く、ややくすんだものは紅のあとのように見えた。

東西文化の十字路といわれるアフガニスタンを、昔、ベニバナは西から東へとかけぬけたのであろう。しかし、現代のアフガニスタンでは恐らく油料作物として、わずかに民の生命の糧として作り続けられているのであろう。

最後に訪問したエジプトでは、終に、ベニバナの栽培地（といっても刈り取られたあとであったが）と、利用の現状を見ることができた。栽培はナイル川岸の潅がい可能な畑地で行われていた。収穫した種子は自家用程度の量を残し、搾油用に売り、自家用種子はパン（ナーン）焼の際に使用するという。農家で刈り取ったベニバナ株を見せてもらった。それは古典品種ではなく、アメリカで改良育種された採油量の多い品種のようであった。

ナイル川沿岸では、ほかにヒマワリ、ヒヨコマメ、オクラなどが重要な作物であることを知った。また、アスワンの街では、香辛料や着色料を専門にしている店でベニバナの乱花が売られ

ているのを見た。紅色や黄色は食品の色つけにかかせないとのことであった。酷暑の国の食生活には、さまざまな色の演出が日本では想像ができない程、重要なものであることを学んだ。

平成二年十一月七日放映の「紅花ロマン・化粧のルーツはシルクロードにあった」（テレビ朝日・オルタスジャパン）によると、カイロの国立農業博物館には三千五百年前のものという「紅花の帯」が展示されていたという。これは、ミイラと共に埋葬されていたもので、死者の旅立ちに必要なもので、ほかに、同年代の多量のベニバナ種子も展示されていたが、いかに乾燥の国とはいえ、保存の良さには驚くばかりである。

三、トルコのベニバナ事情（高橋信敬氏の調査による）

ここに紹介するのは、すべて一九八〇年にアンカラの日本人学校教師をしておられた高橋信敬氏（現在ケニア駐在）の通信によるもので、私はトルコの地を踏んだことはない。高橋氏は任地にあって余暇をさいては栽培地を訪ね、村人と会話し、現地の写真も送って下さった。また、アンカラ大学農学部、カミル・イルスル博士に会い、トルコのベニバナ事情を聴取された。以下はその要約である。

「トルコのベニバナは一九四〇年前後にブルガリアより伝わり、バルケシル県を中心に栽培されている。現在、約二千haにも広がり、種子生産量は一、六〇〇t位、しだいに増加の傾向

である。ベニバナは食用油としてだけの利用にとどまらず、石けん、ワニス、みがき粉、ワックス、軟こう、染料など多目的に利用されつつある」という。

その後、高橋氏のとりなしで、私はイルスル博士に若干のベニバナ関係の資料を送り、イルスル博士からは「トルコのベニバナ栽培の研究」という二〇ページほどの論文を頂戴した。これは私には解読できないトルコ語の論文であったが、要約が英文で書かれてあり、しかも図と写真のタイトルにはイルスル博士が英文で解説をつけて下さったので、大体の様子を知ることができた。

それによると、「トルコの植物油の年総生産量は約二五～二八万t。そのうち、七・五～九万tがベニバナ油、八～九万tが綿実油、七～一三万tがオリーブ油であること。ベニバナ油は輸出しておらず、今後増産の計画があること。目下、耐病性品種を育成中であり、多雨の年を除けば、トルコは気温、日照、湿度などベニバナ生産には十分な条件をそなえていること。ただし、遅播きすると収量が劣ること」などが述べられていた。

トルコで栽培されているベニバナの品種は一〇品種（その中で四品種は晩生）。写真や挿絵（図24）から推察すると、草丈が一m位、長稈多分岐型のベニバナで、採油を目的としたヨーロッパ系のものと思われた。

その後、イルスル教授との交流は途絶えてしまったが、現在、山形県寒河江市は、トルコのギレスン市とサクランボを通じて交流があることなどから、今後は、山形県の園芸特産物全般

を通じて、この国との交流をはかるべきであろう。

四、中国のベニバナ事情（文献11による）

一九八二年秋、私は中国河北農業大学を訪れる機会が与えられ、河北省内の果樹（主にカキ、リンゴ）を見学することができた。帰国前日、北京市内の書店でベニバナの栽培手引き書（一四六頁）を見つけ買い求めてきた。

これから紹介する中国のベニバナ事情は、本書末尾の文献にあげた同書（呉慶祥・黎大爵編『紅花』）の要点をピックアップしたものである。

中国のベニバナは二千年以上の栽培歴があるが、油料作物としてとりあげられたのは第二次世界大戦以後のことで、本格的に国内各地で生産が行われはじめたのは一九七八年頃からである。中国内のベニバナ主産地は河南省であるが、そのほか全国各地で栽培が行われている。

現在の主要品種は**表13**にあげたように、主としてアメリカ、メキシコからの導入品種及びそれらからの育成品種で採油量の高い品種の普及がはかられている。

栽培技術（施肥、病害虫防除、水管理など）は、アメリカの技術書にならって記述されていて、かなり高い水準といえる。ただし、専ら採油目的の栽培管理が述べられており、染料用の紅についてはほんの一、二頁しか説明されていない。干花（乱花）は、一部で生産されており、

図24：トルコのベニバナ（品種名不明）

高橋信敬氏がトルコの栽培現地を写して送ってくれた写真では、礫の混ったやせ地に植えられていたが、テレビ朝日の放映では、サクランボの樹間に雑草のように栽培されていた。

日本むけにも輸出されている。

平成二年三月一〇日放映の「シルクロードロマン・紅花の歌が聞こえる」（山形テレビ制作）によると、中国天山山脈のふもとウルムチにはベニバナ畑及び栽培農家が、いまだに残っていたが、染料としてのベニバナは姿を消していたという（ただし、「紅花の歌」が踊りとともに引き継がれていたというから、遠い昔には紅染めも行われていたのかも知れない）。

さらに、平成二年一一月七日放映の「紅花ロマン・化粧のルーツはシルクロードにあった」（テレビ朝日・オルタスジャパン）によれば、中国西回廊、張掖、三工村のベニバナ栽培は、古くから行れていたもので、その利用方法は、干花を饅頭の中に直接入れたり、漢方薬の素材の一つとなっていた。

以上、海外におけるベニバナ栽培の事情について、二、三紹介したが、いずれも種子生産を目標にした油料作物としてのベニバナ事情であり、日本・山形のように、衰退したとはいえ、今なお紅染めに限りない期待を寄せている国々は見あたらない。

『最新園芸大辞典‖誠文堂新光社・一九六八』によると、「現在ベニバナを染料用として経済的に栽培しているのは、南フランスとインドのベンガル地方に限られており、これも次第に減少している」とある。

紅染めについては、ぜひ、これらの地域の情報を得たいと考えている。

五、パキスタンのベニバナ

平成二年一一月七日放映の「紅花ロマン・化粧のルーツはシルクロードにあった」（テレビ朝日）によれば、パキスタンのフンザ地方では、農家の庭先で普通にベニバナが栽培されており、花を摘み取り、手で押しかためて紅餅を作り、これを水にほぐして黄色色素をしぼり出し、これを常食のチャパティー（パン）に入れたり、花べんの乾燥粉末をチャパティーに入れていた（図26）。

映像でみる限り、パキスタン、フンザのベニバナは草姿は山形の最上ベニバナに近く、トゲも多かったが、花弁の色は黄色が濃く、終花期に至ってようやく花弁基部に紅が浮びあがる程度のものであった。

フンザでは種子は平らな切石の上でつぶし、油を採って食用とするという（図27）。

図25：パキスタン（フンザ、カリマバード）におけるベニバナ栽培

図26：ベニバナ花べん粉入りのチャパティー（パン）を作る
パキスタンの婦人達

図27：ベニバナ種子からの採油状況
（パキスタン、フンザ地方の家庭で）

（図25～27はオルタスジャパン小原氏の好意による）

現地取材のフィルムでは、農家の庭の片すみがベニバナ畑で、無造作に花を摘んでは、そのまま花びら（黄色の色素を利用、他は捨てていた）をパンに入れ、種子を石でつぶして得た油で揚げていた。これを食べていれば長生きできるのだという。のどかで、うらやましい映像であった。